俳人協会新潟県支部報
No. 94
令和7年4月15日

令和7年度県支部総会記

上野昭一

令和7年3月16日午後1時より「万代市民会館」に於て、恒例の県支部総会と併催句会が開催された。生憎の大風・大雨注意報が発令中で出足が心配されたが大事に至らず開催することが出来た。今回も本部より飯田晴先生をお迎えして実施された。

総会は熊谷國男幹事長の司会の元、開会宣言、予め用意された日程表・議案書により進行された。

開会挨拶は山口啓介支部長。支部長として句会の現状、進め方と大所からのご挨拶に引き続き来賓の飯田晴先生のご挨拶を頂き、会員の動向、新会員の紹介があって、のち、議長は規約により山口支部長により議事は進行された。議案は下記の通り。

第1号　令和6年度事業報告及び令和6年度収支決算
第2号　令和7年度事業計画及び令和7年度収支予算

提案説明は懇切丁寧に幹事長よりなされ、また、令和6年度の監査報告があって、議案は無事承認議決された。これは、議案書の事前配布で周知徹底があっての事であろう。

引き続き、第7回「支部俳句大賞」の選考説明の後、大賞・準賞・佳作者の発表があり賞状の授与がなされ会議は閉会した。

休憩ののち併催句会は事前の参加者全員選句により、今回の披講は簇本春美氏、事情によりお一人での担当であったが手慣れたもの明るい美声で句会は進められた。

さて、句会では待望の来賓の飯田晴先生のご高選・ご講評を一喜一憂をもって拝聴したのは言うまでもない。句会の結果は担当の慎重なる得点集計がなされ、それぞれの入賞者の表彰があって後、執行部より改めて事業の説明と参加要請等があって総会併催句会は無事閉会となった。

飯田　晴先生（特選三句）

弥彦より風来て葱の太りけり　関矢　紀静
鴨一羽翔ちて瓢湖の動き初む　倉井　幸子
雪踏んできし沓ならぶ雛の客　越野　蒼穹

飯田　晴先生（佳作十二句）

蛇口より水迸り年新た　寺尾亜真李
北風や砂が砂擦る松林　寺尾亜真李
受けてまた次へ告ぐる訃日短　寺尾亜真李
百日の赤子のにほひクリスマス　関矢　紀静
牛誉めて鯉誉めてゐる年始客　関矢　紀静
白鳥の羽搏つときは水に立ち　倉井　幸子
海苔を干す路地の日溜り使ひきり　水野　宗子
戸の音に散りてまた寄る寒雀　村山　映子
積み上げし雪に隠るる隣家の灯　本間　加津
木の根明くみんな息して生きてゐる　山口　啓介
水底の砂紋あらはや日脚伸ぶ　熊谷　國男
雪面の天日に楮晒しけり　熊谷　國男

（高得点句）

木の根明くみんな息して生きてゐる　山口　啓介
引鳥の数揃ふまで旋回す　下條　春秋
海苔を干す路地の日溜り使ひきり　水野　宗子
生るがまま生きる百歳椿明り　小山　洋子
正月を使ひ果たして子等帰る　倉井　幸子
牛誉めて鯉誉めてゐる年始客　関矢　紀静
百日の赤子のにほひクリスマス　関矢　紀静
受けてまた次へ告ぐる訃日短　寺尾亜真李
積み上げし雪に隠るる隣家の灯　本間　加津

（合点成績）

1位 12点（特5）下條　春秋
2位 12点（特4）山口　啓介
3位 11点（特2）関矢　紀静
4位 11点（特2）倉井　幸子
5位 11点　寺尾亜真李
次点 9点（特3）矢澤彦太郎

第7回 支部大賞に村田恭子氏
準賞には渡邉幸子氏

第7回支部俳句大賞の応募句は80名、240句。会員の54%の参加でした。昨年は87名261　句で、57%の参加。

選考は15名の選考委員により、1次選、2次選の選考過程を経て大賞・準賞それに佳作7句を決定いたしました。表彰式は3月16日の支部通常総会の席上で行いました。

大賞

自画像の大きな瞳卒業す　村田恭子

準賞

秋うらら母に絵本を読み聞かす　渡邉幸子

佳作（7句）

生身魂逆らはずして従はず　秋山保子
化粧せぬ母の一生実紫　土屋瞳子
秋澄むや水に影置く石ぼとけ　渡辺信子
顔見せに寄つてみただけ栗おこは　古川よし秋
ふるさとの海盛りあがる鰤起し　矢澤彦太郎
ふとよぎる別れ作かも稲を刈る　上野昭一
流れ星明日の予定は生きること　籏本春美

（以上句稿番号順による）

※佳作の中に既発表作品と類似した句がありましたので、削除させていただきました。

【選考経過の概要】

選考は15名の選考委員により、1次選として投句240句の中より特選3句、入選15句を選句。その結果、特選句と入選句の合計点が5点以上の10句を大賞候補とした。2次選は、大賞候補の中より大賞1句と準賞1句を選び、1月19日の選考委員会に持ち寄り得点集計した。当日欠席の委員には事前に選句結果を提出してもらった。

得点集計の結果、単純得点合計で、得点5点が1句、得点4点が3句となった。そこで、大賞と準賞の評価を大賞2点、準賞を1点として再計した結果、最高得点は9点、次いで7点句が1句、3位は6点が1句となった。

選考委員会では、委員長の山口支部長を座長とし得点結果を確認するとともに俳句大賞に相応しい格調かどうか、類句類想の句になっていないかなどについても審議した。その結果、9点の「自画像の」の句を大賞に、7点の「秋うらら」の句を準賞に決定した。3位以下を佳作とした。

役員体制について

支部長・山口啓介（野火）
副支部長・上野昭一（かまつか）
副支部長・井口光雄（春野）
顧問・森山暁湖（風港万象）
顧問・矢澤彦太郎（河）
参与・川崎陽子（河）
参与・山之内喜七（庭）
参与・若井新一（香雨）
参与・赤塚五行（朱鷺）
幹事長・熊谷國男（一葦）

∧監事∨

倉井幸子（河）
本間加津（香雨）

∧新潟県俳句大会委員会∨

委員長・矢澤彦太郎
委員・山口啓介・渡辺徳治・井口光雄・水野宗子・川崎陽子・平賀寛子・籏本春美・山口あつ子・寺尾亜真李・熊谷國男

∧支部大賞選考委員会∨

委員長・山口啓介
委員・矢澤彦太郎・川崎陽子・森山暁湖・赤塚五行・井口光雄・井澤秀峰・石黒正勝・上野昭一・越野蒼穹・水野宗子・山之内喜七・山口あつ子・若井新一・渡辺徳治・熊谷國男

∧支部報編集委員会∨

委員長・渡辺徳治
委員・籏本春美
事務局（兼務）

∧幹事∨

井澤秀峰（汀）
石黒正勝（無所属）
伊藤正一（鶴・初蝶）
越野蒼穹（銀化）
鈴木正芳（銀化）
土屋瞳子（野火）
寺尾亜真李（銀化）
戸田一子（野火）
籏本春美（野火）
平賀寛子（春耕・あきつ）
水野宗子（汀・かまつか）
八子栄子（青山）
山口あつ子（野火）
渡辺徳治（鷹）

第14回新潟県「花と緑」吟行記

関矢紀静

10月20日、新潟市下町界隈で第14回新潟県「花と緑」吟行会が開催された。当日は、ぐずついた天気もようやく落ち着き、少し陽の差す秋日和となった。

吟行地の新潟市下町界隈は、歴史博物館・旧新潟税関庁舎・旧第四銀行住吉支店・石庫・湊稲荷神社・金刀比羅神社・北前船の時代館・長音寺・料亭大橋屋など、新潟の歴史を語る多くの建造物が残され、往時を偲ぶことが出来るコースであった。

歴史博物館では、その立派な外壁に驚かされ、旧新潟税関庁舎では貴重な巾着窓を見ることが出来た。残念ながら館の回りの堀は水が抜かれ、空の状態であったが、それもまた風情のある眺めであった。庭などは海風に晒されているはずであるが、きれいに整備され、見学者を気持ち良く迎えてくれた。そして海上の安全を祈願した金刀比羅神社や高麗犬の像が回転し、回しながら祈ると願いが叶うという珍しい像のある湊稲荷神社も参拝した。他にも、嘉永6年に建てられた長音寺や料亭大橋屋にも足を運び、なかには本町下市場を見学した参加者もいた。

16名の参加者は思い思いのコースを巡り、北部総合コミュニティセンターにて午後1時より句会が開催された。投句3句、互選5句内特選1句とした。

山口啓介支部長の挨拶の後、簇本春美幹事による披講。合評後に成績発表。支部長はじめ幹事の方々による講評が行なわれ、その後表彰となった。最後に熊谷國男幹事長の挨拶があり、第14回新潟県「花と緑」吟行会は閉会となった。

吟行会成績結果

一位　7点
水の無き堀に風あり海桐の実
簇本　春美（新潟）

二位　5点　内特選1点
下町に残る昭和や秋の風
八子　栄子（新潟）

三位　4点　内特選2点
北前船の通ひし湊雁渡る
倉井　幸子（新潟）

四位　4点　内特選1点
石庫の外壁白き素風かな
熊谷　國男（新潟）

五位　4点　内特選1点
秋陽濃し旧税関のなまこ壁
倉井　幸子（新潟）

。参加者の作品　申込み順

再現の堀はからっぽ秋の風
寺尾亜真李（新潟）

水みくじ小吉と出る秋の水
鳴海　久代（新潟）

下町の空地のあればねこじゃらし
山口　啓介（新潟）

高麗犬のぎいーと左へ秋の昼
村山　靖子（新潟）

空耳に道楽稲荷蚯蚓鳴く
渡辺　啓子（新潟）

銀杏や神の言葉のやうに落つ
大橋　節子（三条）

高麗犬を信じて回す秋の声
菅家恵美子（加茂）

金刀比羅神社の金運こづち振る晩秋
戸田　一子（加茂）

秋澄むや安政六年願隋寺
渡辺　イッ（加茂）

秋鮭や本町市場出刃光る
丘　のぼる（新潟）

附舟町紅葉入船町黄葉
神原　一子（新潟）

秋草に屈めば命温もりぬ
小出　利恵（新潟）

ふるさとの人工堀の紅葉かな
関矢　紀静（長岡）

古典文法に手こずる

熊谷國男

私にとっての俳句は平成8年10月に茅ケ崎市で「俳句入門講座」を受講したことから始まる。講師は一葦俳句会の主宰島谷征良先生。講座は6ヵ月コースで翌年3月終了した。俳句を選んだ理由は定年退職後の余暇対策として考えた。それまで俳句については全く無縁だった。講座終了後に「一葦」に加入し、現在に至っている。

島谷主宰は師である石川桂郎（「風土」主宰、明治42年生、昭和50年11月6日永眠）についてよく話をされた。桂郎は門下への指導理念として「手前の面のある句を作れ」と説いた。これを単に個性的な句を作ればよい、と理解してはならない。表現をぎりぎりの限界まで追求してゆく過程で得られるものだという。つまり、自らが表現を鍛え、季語を選び抜くことである。初心者にとって理解するには仲々難しい話であった。

句会を通して、俳句は省略の文芸であること。自分の言いたいことを「物で表現する」のが俳句だと知った。主宰は常々、「文法を軽んじてはならない。」と言っている。注意すべき助動詞、例えば完了の助動詞「り」などについて講義をされた。句会が終わると反省会と称して居酒屋で主宰を囲んでの直会は楽しい思い出となっている。

茅ケ崎から鎌倉までは近かったので、週末に鎌倉でひとり吟行し、四季折々の自然と神社仏閣を巡り写生による自然詠ばかりを作っていた。散歩地図にあった神社仏閣や鎌倉七口（一部通行止）と言われる切通しは足掛け2年ですべて踏破した。私にとって鎌倉は俳句道場であった。正岡子規の『俳諧大要』など俳書も読んだ。俳句にのめり込んでいた。

俳句を始めて手こずったのは、古典文法だった。古文については高校の授業で「徒然草」や「枕草子」「源氏物語」などを習ってはいるが、文語で実際の文章を作るということはなかった。そのため用言の活用語尾や助動詞の接続など、いざ句を手帳に書き込むとき、さてこれはどうだったか？と悩むことが多かった。文法のことはすっかり忘れてしまっている。今は息子の使った古典文法の教科書を脇に置き重宝している。

俳句を初めてもうすぐ30年になる。余暇対策として選んだ俳句ではあったが、この上ない充実した俳句人生だったと思っている。

俳句・初心の頃

思い出

山口啓介

俳句の初心時代と言われても、七十年近く前の事であり朧げであるのが正直なところである。

私が俳句と関わるようになった切っ掛けはある青年との出合いである。「お前俳句を作るらしいが、俳句の会に出て来ないか」というのが最初の言葉であった。

当時の田舎の青年の楽しみは、週一回の土曜日に映画を観るか、夜は青年団の集まりで村の公会堂の囲炉裏を囲み時には茶碗酒を飲み乍ら「これからの社会は」、「農業の前途は」等々議論めいた事をやっていた。従って誘われたとは言え、月に二回程の俳句の会は息抜きの機会でもあり、楽しかった。

上林厚一氏が私を句会に誘った理由は、村の祭りの奉納俳句からだったらしい。当時青年団員の義務として、俳句らしいものを作らされたのであった。

その上林氏が村松の療養所に入院中に俳句を習ったらしい。そこには馬酔木新潟支部があり、ガリ版刷の「芽」という俳誌を出していた。馬酔木は水原秋桜子が新しい俳句を目指して「ホトトギス」から分かれた結社でありその中に篠田悌二郎先生がおられ、新入会の指導を任せられていたのであった。

新潟馬酔木支部の「芽」は悌二郎先生が指導されていたが、多忙の為に林翔先生に任せられたのである。従って私が最初に指導を受けたのは林翔先生であり、悌二郎先生は雲の上的な存在であった。

滝風に病葉おのが早さで散る

この一句が初めて活字になって林先生に誉められたのであった。季重ねであるが面白いと言う評価だったように思う。秋葉区の「白玉の滝」吟行の句であったが駆出しの私としては無我夢中の一句であった。

私の俳句人生は、まさしく人との出合いであった。上林厚一氏をはじめ江口真砂浪氏、太田秋瓶氏、桂半夏氏、本間信峰氏等が近い人達である。とりわけ江口真砂浪氏（後の県俳協会長）は私の職場の上司であった。新津は鉄道の町だっただけに鉄道員が多く、特に太田秋瓶氏は「鶴」の同人であり、新潟出身の石塚友二先生と親交が深かった。秋瓶氏宅での句会の折、友二先生が「君に一句やるよ」と言われて頂いた短冊は、私の宝物の一つとなっている。

月仰ぐ顔に煤降る新津駅

は新装なった新津駅前に句碑として古き良き時代の面影を伝えるよすがとなっている。

初心者の頃の思い出の一句としては新潟日報に投句した、

雪山と月との対峙はじまれり

が石田波郷先生の選評を頂いた事であった。

ともかく俳句が無ければ今の私の人生は無いと言って良く、山口あつ子との出合いも俳句が縁である。

○句会報

河新潟支部一月例会　つばくろ句会　月例会

令和7年1月12日(日)
会場・新潟市万代市民会館

三日はや島山を朱鷺ひるかへり　矢澤彦太郎
冬ざるる正岡子規の右の顔　川崎　陽子
初霞うつすらと紅引かれある　春川　暖慕
炬燵寝の猫に自立をうながせり　宮　京子
正月を使ひ果して子等帰る　倉井　幸子
祈るごと五年日記を買ひにけり　小出　利恵
雪山の襞が近くに迫る朝　斉藤　忠吉
八畳の居間へ三つの初暦　田中いずみ
七福神巡りてしめる汁粉椀　広瀬喜代子
連れ来たるペット真中に初写真　樋熊　節子
雪雲の切れ目をしばし見遣りけり　大井　則夫
弥彦より風来て葱の太りけり　関矢　紀静

（報・関矢紀静）

令和7年2月4日(火)
会場・燕市中央公民館

咲き初めし梅の花弁露ひかる　大橋　初美
転ぶなと声をかけられ凍土踏む　相場　祥子
暁光の吾が里春の立ちにけり　金子加津久
囀りや雨後の梢を渡りつつ　吉田千代美
昨日今日血圧高し冬薔薇　杉山　安子
コーヒーの香り一筋春を待つ　野島　正子
湯に浸る足先ひびく冬の雷　深海クニォ
湯豆腐が一番好きと今日の膳　田中田鶴子
まんさくの花芽小さき登山道　山崎　慶子
凛として箸に抗う寒卵　伊夜日子の峰輝かに深雪晴
眼を閉じてより日向ぼこらしくなり　孫もゐてこの上もなし雛祭
白菜を抱き老妻のこゑ弾む　矢澤彦太郎
思い出せぬ言葉を探す懐手

（報・矢澤彦太郎）

庭月曜俳句会

令和7年1月6日
会場・並柳担い手センター

見通せし道の起伏や冬の旅　林　道子
雪掻くや無言の境ある隣　大島　詠志
角そろへ畳むタオルや年迎ふ　大島いと女
ゆたんぽに足裏ぴたり夢に入る　佐藤　昭子
夕暮のクリスマスソングにひとり　佐藤　節子
土鍋もてひとりに炊いて冬至粥　渡辺　幸子
県境の峠に鎖山眠る　佐藤　健
天寿とは何時のことやら冬銀河　羽賀　晴子
初雪や樹の下陰を塗り残し　清水　邦美
おしやべりの秋の蝶来しちひろ館　山之内喜七

（報・山之内喜七）

新潟野火会

（新年紙上句会）

七種に輪島の塩を一つまみ　大橋　節子
初稽古剣道場にのぼる湯気　笠原　徹
小社の杉の木立に初明り　菅家恵美子
雪の花咲かせて朝の樵林　小池　旦子
語る夢実現近し福寿草　小林　風千
降る雪や誰にも会はぬ昭和橋　酒井　道子
帰る子の尾灯見送る雪時雨　佐藤　とよ
大旦昭和百年となりにけり　杉江　典子
病む母へ七種粥を吹きくぼめ　竹田　裕子
立春やギリシャ神話の星の数　土屋　瞳子
稚抱きて重なる鼓動冬木の芽　戸田　一子
昔日のフォークソングや日向ぼこ　長谷川眞一郎
蔵元の梁の漆黒寒日和　番場勢津子
暖房や部屋に蕾の鼓動あり　番場ノリ子
佐渡金山世界遺産の初景色　村山　靖子
臘八や釈迦にレノンに五十六　山口　啓介
鳥を待ち根明けを待てる雑木山　山口あつ子
初鏡背筋伸ばせと云はれけり　渡辺　イツ
よく晴れて畑の葱採り凍てをり　渡辺　啓子
ぽたぽたと氷柱を泣かす日の上る　渡辺セツ子
初凪や沖に日のあり船のあり　簇本　春美

（報・簇本春美）

「朱鷺」俳句会

令和7年2月25日(火)
会場・潮津の里

初空へ羽ばたく朱鷺の羽音かな　浜田　萱草
猪頸(いくび)なる父にマフラー巻いてやる　菊池　武美
大鍋の昭和ほろほろ煮凝りぬ　羽生　雅春
和紙を漉くやうに届きし春の波　松本　明子
昭和百年流るる刻や去年今年　長部　憲忠
初空や朱鷺未来図を描くごと　江上　マノ
去年のもの机辺にあふれ今年かな　田中みちこ
島にして佐渡は一国初山河　菊池　健

詩集編む紙の白さの淑気かな
中村　梨恵
かしこまる猫の両手に初明り
井上　祥子
重なりし二十日正月通院日
稲垣　和江
息災や土の匂ひの七日粥
浜松　智弘
小さき靴小さき靴下春隣
西崖　コウ
きのふ今日あしたが大事初日記
正本　陽子
喜寿になるまだある夢の初御空
絹沢　裕子
新聞の折目正しう冷えてゐる
金子　富也
入院のページ真白や日記果つ
若林　通子
雪嶺に礼し白蛇の神拝む
金子よし子
初糶や秤はみ出る出世魚
坂下　浅一
どんど焼弾ける音は村走る
長谷川則子
田の神を深く眠らせ雪の山
藤田　ゆき
仕事せぬ爪伸びやすし三日はや
赤塚　五行

（報・赤塚五行）

○私の吟行地

三面川周辺

徳永武子

いつの間にか年齢を重ね、足許が頼りなくなり、遠出が無理になってしまった。唯、有難いことに目の前にお城山があり、お向かいの樹齢百年の桜が見事で居乍らにしてお花見が出来、六斎市も近く、何とか身の回りで句作りをしているこの頃であるが、鮭の頃になると循環バスを利用して三面川の鮭漁・居繰網漁など見学したくなる。亦春になれば、三面川の分流である種川（江戸時代に鮭の産卵を保護しその繁殖を図った施設、その制度）に、子供達が鮭の稚魚を放流するのを覗いてみたくなる。

私は、郷里に戻って十年余になるが、まだ元気だった頃に県内をいろいろと歩いておけば良かったと、今更ながら後悔している。

種川の稚魚みな発ちし葦雀
武子

イ〇ンモール

丘のぼる

旅先で特に吟行する以外は普段の吟行地と言えば、多くの人は、近くの公園や自宅近くの散歩コースをあげるのではないだろうか。

私の場合も同様で皆さんに特段紹介するような公園、名園があるわけではない。又、昨今の異常気象により夏の猛暑、冬の大雪などで外での快適な散歩（吟行）が出来ない期間が長くなってしまった事が大きな悩みである。

そこで、その悩み解消の為自宅（新潟市江南区）近くにある「イ〇ンモール」にウオーキングと吟行を兼ねて度々足を運んでいる。そこには、衣料品や飲食関係の店が並び、季節それぞれの服や食品、更に四季折々のイベントが開かれている。夏涼しく冬暖かくウオーキングには誠に打って付けなのだが、ひとつ欠点がある。それは、レストランの美味しそうなポップにつられ度々食べ過ぎてしまい、ウオーキングした以上のカロリーを取得してしまうことである。

マネキンの睫毛に宿る春愁

魚沼の里

片桐さと子

南魚沼市長森にある「魚沼の里」は八海醸造の酒蔵を中心として蕎麦屋、パン屋、おにぎり屋など飲食店が点在し、特に一般の人も利用できる「みんなの社員食堂」の大きな窓からは、春は桜並木や菜の花、夏はひまわり、秋はコスモスや蕎麦の花、冬は雪に立つ裸木と四季折々訪れる人の目を楽しませてくれる。

中でも私のお気に入りは秋の吟行で、蕎麦の花の中を歩き、木陰のベンチで句帳を開いたり、コーヒーを飲みながら揺れるコスモスを眺めたり、藤袴で翅を休めるアサギマダラも見応えがある。

酒蔵から立ち上る仕込みの湯気の香を感じながら、ハート形の桂の木の葉を拾ったり吾亦紅や女郎花などの草花の小道に入ると、庭師の方が手入れの手を止めて丁寧に花の名前を教えてくれたりする。

運が良ければ移動書店に出合うこともあり、自然の中での立ち読みも格別です。

立読みの移動書店や秋惜しむ
さと子

春日山城跡

小林淑江

自宅より車で15分くらいの所に春日山城跡があり、登山の足馴らしに行きます。上杉謙信公の居城として有名で、石垣がなく空堀や土塁が多く見られます。

入口には御前清水があり、汲んでいる人をよく見かけます。長い階段を登っていくと春日山神社の正面に。坂道を登ると、直江兼続屋敷跡です。春に片栗の花が咲き、私の好きな場所です。毘沙門堂や護摩堂を経て本丸へ。標高百八十メートルにある本丸からは、日本海・頸城平野・砦跡のある山並みが一望できます。大井戸・二の丸・三の丸と戦国時代に思いを馳せます。

夏にかけて著莪の花・杜若紫陽花が咲き、蝶や蜻蛉も飛び交います。秋には一本銀杏が黄金色に輝き、どんぐりや山栗が足元に落ちて、四季折々の豊かな表情も見せてくれます。茶屋の傍には謙信公銅像が、威風堂々と立っています。

謙信像睨む青嶺は甲斐の国
淑江

私の近詠

『私の近詠』は原則として、アイウエオ順に掲載。（編集部）

柚子湯

井上祥子（朱鷺）

色鳥のひかりをこぼし樹から樹へ
秋光や椅子のアームの黒光り
秋澄むや篠笛にきく風の音
新走り夫の好みし黒唐津
孫のあと入る柚子湯のやはらかき
八十の伸びしろ無限福寿草
あやす子の手の温々と目借時

松迎

越野蒼穹（銀化）

ひととせの予後も不確か種を採る
光陰のゆるりと乾ぶ吊し柿
新絹の月の光りに展べらるる
雪白を泥が育てし蓮根掘
むささびの月をまたぐも自在なり
大根のちから抜けしを横たへる
松迎しらゆきはらふところより

炎花

村山映子（香雨）

二杯目のビール話のよどみなく
回想の時々途切れ蟬しぐれ
かなかなや食卓に椅子一つ減り
炎花一人ひとりに物語
青物の売切れの札寒日和
干し物の影の札上に春隣
玻璃越しの落暉見てゐる春夕べ

春隣

若月柳子（香雨）

焼き上るころのパン屋へ雪催
水鳥のわれ寄る速さにて離る
ひとつ年とつて賢げ初雀
鍋かけてあと一人待つ寒夜かな
久女忌の塩振る青菜みづみづし
片袖を通して鏡春隣
抽斎の千の脚注寒明くる

無敵

上村一九路（銀化）

枝豆を徒疎かに喰らひたる
無敵とは敵を作らぬ秋桜
切株てふ動かざるもの秋深き
紫苑揺れ茎の途中が覚束な
落葉して不徳の致すところなどと
車庫裏が終の住処や石蕗の花
懐手解きてつまりは聞き置くと

赤蜻蛉

西崖コウ（朱鷺）

天高し体操服の群となる
最下位の肩にもとまる赤蜻蛉
母に似た大人になりて林檎煮る
売地との看板隠す花野かな
止まりますボタンの灯る秋の暮
夏風邪や外でシーツの翻る
晩涼や手を振る人のゐる改札

磯あそび

八子栄子（青山）

一年生一番前はチューリップ
花魁の外八文字花の雨
避けきれぬ波を背に浴び磯遊
磯あそび手から小魚逃れたり
ずぶ濡れのままの少年夕立ち中
蚊喰鳥手の中きゆうと一鳴きす
海の味少ししてをり西瓜割

初坊主

渡辺水穂（浮野）

はるばると来て初坊主初句会
プレゼンの朝や余寒の眉を引く
夕風を四つに畳みて花筵
合宿や指揮者素足の踵上ぐ
残さるる飛び込み板の撓みかな
長き夜や匙半分の隠し味
虎落笛湯船に丸き膝ふたつ

事務局だより

幹事長　熊谷國男

◇3月16日、令和7年度支部総会を俳人協会より飯田晴評議員を来賓としてお迎えして開催。議事は1号議案令和6年度事業報告及び収支決算、2号議案令和7年度事業計画及び収支予算を原案通り可決承認し、令和7年度の支部活動がスタートしました。

《令和7年度の事業計画》

○花と緑新潟県俳句大会
　日　時　7月20日（日）
　会　場　朱鷺メッセ
　　中会議室
　講　師　山田真砂年
　　俳人協会評議員
　「稲」主宰

○支部新潟県吟行会
　日　時　10月18日（土）
　吟行地　加茂山公園周辺
　句会場　加茂市民会館

○支部俳句大賞
　実施時期は9月中旬より

○支部報の発行（年2回）

《令和7年度の収支予想》

収支予想はたいへん厳しくなります。昨年10月からの郵便料金の30％値上げを始め諸物価高騰で、支出増が大きく影響することは必至です。収支予算では、次期繰越金が前年度の繰越金を相当下回る予想です。経費節減に努めていきます。

◇支部会員の消息（敬称略）

1. 令和6年度新入会員（6名）
　井上　祥子（佐渡）朱鷺
　上村一九路（田上）銀化
　西崖　コウ（新潟）朱鷺
　村山　映子（新潟）香雨
　若月　柳子（新潟）香雨
　渡辺　水穂（柏崎）浮野

2. 令和6年度死亡・退会（10名）
　死亡（1名）
　服部かねよし（南魚沼）春野
　退会（9名）
　柏森　昌（加茂）青山
　佐藤　文子（新潟）蘭
　高橋　ひろ（新潟）万象
　谷井野武士（新潟）香雨
　中村　昭義（新潟）百鳥
　平岩　静（佐渡）春耕
　星　美也子（魚沼）庭
　星野ひろ子（尘谷）風港
　増田　芳男（新潟）貂

○令和7年1月1日現在会員数150名（前年同期154名）

3. 令和7年度新入会員
　2名（2月入会）
　矢尻ゆきを（新潟）無所属
　横森　宏子（小千谷）航

4. 令和7年度退会6名（1～2月末）
　小栗　八重（新潟）沖
　神田　絹子（阿賀野）野火
　須賀　智子（新潟）隗
　釣巻由美子（新潟）野火
　山城　やえ（佐渡）春耕・あきっ
　山本　武子（新潟）隗

○令和7年3月1日現在会員数146名

ご逝去された方には、ご生前のご協力に感謝いたしますとともに心より哀悼の意を表します。また、退会された方々にも長年に渡るご協力に感謝申し上げます。

8名の新会員の皆様には、今後益々のご活躍を期待いたします。

◆訂正とお詫び

前号第93号の1ページの「俳句大会記」の、『郡萌』は誤りで『群萌』でした。『那々』は誤りで『耶々』でした。

6ページの「俳句の初心の頃」の、井口光雄記の「主催」は誤りで、「主宰」でした。山口あつ子記の「出版の歳」は「出版の際」でした。

8ページの「事務局だより」の、「社甫」は「杜甫」でした。「季白」は「李白」でした。

それぞれ、編集部の校正漏れでした。深くお詫び申し上げ、訂正をさせて頂きます。

◆お願い

支部報掲載の希望等ありましたら、是非編集部に連絡を頂くと有難いです。掲載時期は編集部にお任せください。

会員の高齢化に伴い、支部会報の原稿依頼が困難になっています。

会員の皆様方のご協力をよろしくお願い致します。

（編集後記）

今朝の新聞一面に三十年前の前代未聞のテロ、地下鉄サリン事件の後遺症に悩む被害者の記事やプーチン大統領がウクライナとの停戦案を拒否したという記事が掲載されていました。何とも心が痛む記事です。

そのような中、東京ドームで行われた米大リーグ開幕シリーズ第二戦でドジャースの大谷選手が今季一号ソロ本塁打を放ったという記事には心が救われました。同じくドジャースの山本選手やメジャー先発デビューの佐々木選手、カブスの今永選手の活躍も素晴らしかったです。米大リーグの開幕戦で鈴木選手も含め5人もの日本人選手が大きな期待を背負って戦ったということは日本国民の誇りと言えます。東日本大震災で亡くなった佐々木選手のお父さんも天国から大きな声援を送っていたに違いありません。

（簇本春美）

私は昔、結社誌『狩』（今の『香雨』）の「評論賞」に投稿した一文で、桑原武夫の「第二芸術論」なるものがある。俳句は解釈で秀句にも駄句にも、変貌する一面があることにその当時、関心を持ったからである。それは、一九四六年一一月に『世界』という雑誌に、「第二芸術～現代俳句について～」と題して発表された桑原の論文である。俳句の現状に対する根本的な批判として発表され、当時空前の反響を呼び起こした。桑原は高浜虚子など著名俳人の作品十句と、無名の人の作品五句を混ぜて大学の教師や学生に見せて評価させた。その結果俳句は「一句だけでは、その作者の優劣がわかりにくく、一流大家と素人の区別がつきかねる」と結論付けた。このことから桑原は「俳句」は、普遍的な享受を前提とする「第一芸術」でなく、いわば「第二芸術」であることを主張した。

私は、この桑原の論に興味を持ったからである。俳人の評価は作品第一だが、合わせて「選句」「添削」「選評」「俳論」の総合力で決まる（言わば車の四輪）ものだと思ったのである。

当時、この桑原の論に対し山口誓子、秋元不死男のように教訓として受け止めた人、加藤楸邨のように動揺した人、高浜虚子のように「俳句は第二芸術まで出世しましたか」ということが？伝わるなど様々であった。

（渡辺徳治）